

スッポンの病害研究

沖縄県水産試験場八重山支場

照屋 忠敬

嘉数 清

はじめに

我県は周年温暖な自然条件に恵まれており、スッポンの成長も他県が商品サイズになるまで4～5年かかるのに対し、我県は3年と非常に早く、その養殖も昭和45年頃から行なわれている。

養殖技術は一応の完成をみたものの、まだ完全とはいえず、とくに疾病対策についてはまだ明確にされていない事が多い。

疾病対策研究を行なうことにより、スッポンのへい死をより少なくし、スッポン養殖業の安定的発展を期したい。

初年度は、へい死の状況調査と環境要因である水質調査及び罹病亀より細菌の分離同定を行なった。

本報告書を作成するにあたり、色々な御便宜、御指導をいただいた関係各位に感謝の意を表する。

1 へい死状況調査

1 目的及び方法

へい死量の季節的变化を調査するために、昭和49年春より51年春までの当支場の親池とI養殖場の親池と養成池のへい死量を比較検討した。

2 結果及び考察

結果は図-1、図-2に示した。

養成池と親池においてのへい死量は異なったパターンを示した。

① 養成池(図-1)の場合

昭和49年の5月の池変え直後へい死がめだち、8月の池変えで、また多数へい死した。16号池より15号池へのスッポンの移動は1,000頭で、うち315頭が一ヶ月以内にへい死している。

昭和50年10月にも、S養殖場において池変え直後、約75%程のへい死をみた。また当支場においても、昭和48年の密度試験の際毎月の測定直後にへい死が集中した。

スッポンは一度取り上げて再び池に放養した場合は、極度に「エサグイ」がおちる。又「池変え」のための取り上げは2～3日も要するので、スッポンに大きなストレスをあたえると思われる。

これらのことから養成池での大量へい死は「池変え」「測定」に原因するものが多いと考えられる。

② 親池(図-2)の場合

これはI養殖場(収容頭数200頭)と当支場(収容頭数100頭)の親池のそれぞれのへい死数を調べたものである。

平均へい死数をみると、いずれも2月にピークがみられ、へい死率は3~5%程度である。又、9月にも小さなピークがみられる。

2月のそれは、冬眠あけて、温度変化も激しく、又、冬場の体力消耗、抵抗力の低下によるものと思われる。

9月のピークについては原因は明らかでない。

図 I 養殖場における養成亀のへい死数

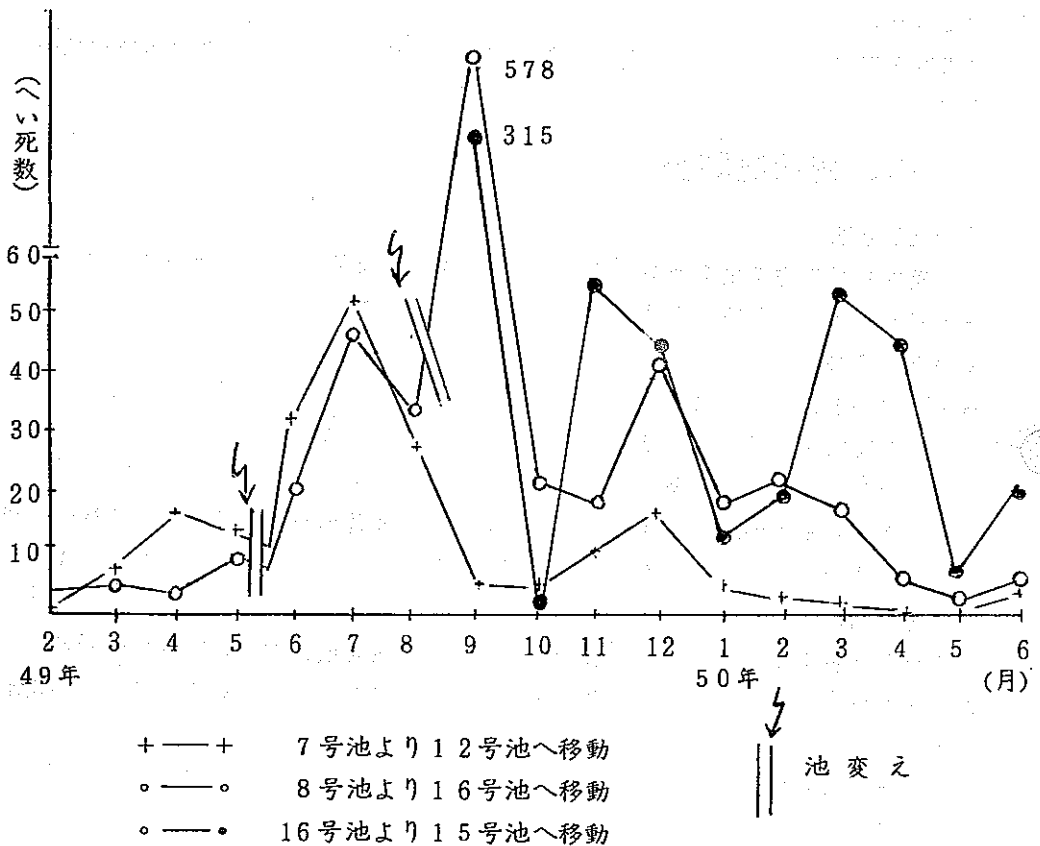


図 I 養殖場と当水試における親池のへい死数

